



職  
名  
簿

老  
楓  
園  
藏

二

中

文 研  
911.33  
Ka16k  
2



911.03  
Kaibte  
2



菊日記

きせ

早稲田真

七月十七日

は日なたこひ風あれて紙のきりきり  
とゆゆくはくもては地よりうきま  
よるも癒癒よひひていといふ  
よきりゆるげわくは親もちよ  
猿床やうりこのね高よおや  
はひししては魂のくは

中

一

早稲田大学大学院  
文学研究科図書

陣坂康隆  
蔵書印  
50-1181

き連はさよしの南窓の智ひもそよのふ...  
はまろ川の水くさこもゆさるる地にて居も地を  
れとゆらゆとせしめてくゝ物のねまよさるる地を  
ししき吾翁の類はれ旅をよかくしつひの  
つくその時とらあはふんをそめくもあはすまの  
あよりわらうねしうらうらう今かく歌ひ百重の外  
見るきて海山のもてよ方をそめくはしてよむ  
宿世のらさくは語泊たなりみそそめくおがく  
つさるのりくわはあくもそめくもあはすまの  
まよさるる月めく...  
まよさるる月めく...  
まよさるる月めく...

中

きつるる食方ふ病をそめくは...  
いふえそ、捕酒ましまし...  
して眉はひそびされ...  
よのほのれおのひ暁を...  
の二層敷よちくま...  
つくもまぬか...  
つるものよひき...  
ら...  
...  
...

中

二

能登の老ちとある人丁と云ふはこれとまらふ  
は十の二回と云ふ事そのおのゝのいふとあるは  
年れりてまきしてはこれのおとくといふことなり  
かまひと云ふかゝるは元は師乃ありぬと云ふ  
丁といふ事なりはこれといふ事なり風船の事なり  
もまむと云ふかたけは酒とあるは丁かた  
この人乃おちくといふ事なりかゝるは  
はけて人となれぬ事ありと云ふ事なり  
なまむといふ事なりはこれといふ事なり  
かまひといふ事なりはこれといふ事なり

廿六日

糸島川分左衛門

九巻

廿八日

口上

まかひといふ事なりはこれといふ事なり  
なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
いふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
はこれといふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
はこれといふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
はこれといふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
はこれといふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
はこれといふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
はこれといふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり  
はこれといふ事なりはこれといふ事なりはこれといふ事なり

口上

三

ト 殆し 杖を 杖に 杖を 杖を 杖を  
月山 夜中 雨 雨 雨 雨

一 悪く せしめ せしめ せしめ せしめ せしめ  
ね ね と せしめ せしめ せしめ せしめ せしめ  
あつ せしめ せしめ せしめ せしめ せしめ  
魚子

木を 訪 訪

廿九日

柏崎 都 都 都 都 都

八月 朔 日

さ 同 同 同 同 同  
携 携 携 携 携  
茶 の 後 上 上 上 上 上  
素 素 素 素 素

各 各 各

は 菊

く ん あり と あり と あり と あり と あり と  
舞 舞 舞 舞 舞  
白 菊 白 菊 白 菊 白 菊 白 菊  
作 冊

菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風

はる春をよよとてよよとてよよとて  
白ありのばあいの日記

菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風

菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風

菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風  
菊の香もよ力付りゆりゆり 食中風



丁二月

金沢の光緒

去廿七日陰車分紙初并に止む  
 系要川沿のまは陸地とて、去廿七日  
 の夜も枝かゝりともさ例の書文と  
 以て来く十七日とを刺痰カト  
 可ともさ力らり成り七ぬし此茶  
 おもてつて殺し減りし今今保快  
 ちや陰夜を待たしつらりと候とも  
 去水五平を等しとて、去廿七日陰車  
 の

難は素力なえ一方中や  
 あり、お掃ありしに連中  
 子中、色つた高方、とくあ地、  
 陰に保書、うぬし陰車、割出  
 尸入とも、物文、とらしく、さ  
 下陰、高方、左中、下、形、い

万子

二月九日

金沢の光緒



をいふはふとくし御物  
ト人喜んず徳一白くあり  
あふひしゆふ

秋の白やち登て、照せし

朝日暮る時

江上ヨリ

雲を度し御物せしや秋の月

名くち舟

つせよ 船はあきり 病ありやと 小枝

30 秋夜しんくうせほひくは 秋の月 牧事  
よふ物をいしと 拾めて 花落 従者  
一故子 穂よむ、まての 後之 穂亦 秋の月

十一日

月見

名月よれあそ 桂の本 後よふ 秋の月

瓦粟や入より 秋の月 桂月  
いふあしふ ことされたる 秋の月

名月よれあそ 桂の本 後よふ 秋の月 全

各條

名月

名月や家腸の松の影の陸夜  
 名月や誰れとまき松乃交石人  
 名月や凡の使れとんまき一改東  
 名月やまきぬ餅の祥の音許丹  
 うんけと暁てはふま月又亦左明  
 小江所たひかりてこそ席よ  
 おくれまきこかくとせと

芋の子れ勝丹が月月んか貫仙

名月や儲をれとけ結れま遠年  
 40 豆の粒ふじとあまきり月又亦 故休  
 名月やまきり縁かぐ一  
 名月のんを及やあくらる身 聖泉

十六日

こら田か女を

名月や家とくの物ねい尾し  
 名月やまきりまきりまきり

十八日

け日二日田の人くふさくちて  
る食れ存法をうのをさめ地は  
田の者ふりおれい針葉の使い  
あーかふいしひら弱法師代  
さうのう路み人の心と後うさ

お山の後うさやせお市の秋 東雲

送別

お心や朝日えりの柳もさら 石人

首途や急夜馳れ 駒いさひ 里風  
けうさうさうきふられて けや備の秋 過角  
芋乃花あやけもさうし 神代 藤車

道のまうしは司周許丹とかさる  
そま田のゆーさるんれうりて

50 早稲のきや 駕籠の片切て 左史右史 豊泉  
夕影のきや 舟はなをりて 取 法東  
さういとして 君さうきふんよ 門出々か 砂伴  
さうしく 旅人のやまいはい 舞代  
食ーさうさやまい 金おれい 又該

乃重二也もしき一とくまふ  
三といひたりしとる傍に餘められ  
小畑を以て二正の旅よりおぼしめし  
大暮れをよそなくうそを懸う於法舟

十九日 糸島川を舟行 九時書通

廿一日 陸夜分書通 方毛木一

廿二日

廿日病床に對する小片のふさ  
ま一とよふふふ

障も来て遊み日わやふれを 九時  
松法をきく日菊をきき也 支考  
不花よりそとる頼のむやうふ 支考  
たけしの徳一武士をふれす 風し  
兵舎小畑乃とくふ船の中 飯考  
信しい庵より 陽去をよそく 阿世

廿四日 美濃小籠泰寺下ゆきの便

ありて国の人より来り初き  
又信りてまゝ家かくまひて  
いさゝかありけり哉といは  
れぬ月の一章の節のなま  
こゝろくまててと奥よ

60 ぬき丹死ありし時を記してありし事乃ち 志を信

二十五日

陸夜をぬかれしく病床をたれ  
し小は日ともなき際くまのたれ  
る

病人を指しり一矢小勢務りの  
志考  
病はひよし秋乃 夕夕業  
風し  
羽二重のまへに月の影瘦く  
陸夜  
指れよ花のさき道たひき  
早作  
く一川をゆるほ小侍の声  
た明  
山をこけくさくふ島てけ  
はみ  
く舟程のくまてやれと  
時ぬぬ 岐を  
師をいよこし志りあり  
たて  
と 青よりまて地より  
くは二日  
戸をぬて人丹ありやと

廿八日

九月二日

病家より人集り  
人集り

70

日折遅小秋面白や 西あけり 更也  
亭々々々色よ 兼てわし して 支考  
け松よ 三日月障り 枝もか し 竹音  
登けり 風め 向き せり 山 亀子  
常陸を 舟本 遣の 書おとこ けり 竹遊  
武士より 文あり 町の 廣きよ 筆

三日

精進

四日

きよしの病後の 髪を せんて 髪君の 徒者  
なる 男の 髪利と ことわけて やる せん  
さねの 侍と せん ことわりの 浦清と 髪を ぬ  
き ぬく やー ことわりの 奇一 曲乃 髪と ぬき  
る ことわりの 四比 かつく ことわりの 髪と ぬ  
き ぬく ことわりの 髪か 白髪 今ん ことわ  
り 却て ぬれ たり ことわりの 南無 佛と ぬき ぬ

中

三

文をよめられて南を酒も兵有と後道  
くくせかふるうもよかの果ももてく  
夕焼むし善化和尙の棺乃中うねみ  
くさされよはけぬを遊つるも髪髪まの  
このほろふしきよの我々快のつふれけの  
名うに髪を積く凡して客の才一うく  
こまは禱肩衣のこくひるる客をさり

かり敷るや髪りねやろく秋の音 赤松  
刈髪笑

利刀よあつぬの秋や 掃捨く 風し

さく白さくえんや 残る屋の月 皷者  
兼れ赤や板の柱小腕まくり 阿世  
左らりし 障子開くや 兼の風 青柳  
80 鯛乃目小鴨しうこくや たすく油 岳亭  
燕やよ力からみたりて 去まぐる 身谷

い日 刈髪女の髪よ

身切ア〜

よみかれぬ日南小姑く 傍の色 石人  
髪らのをえ 同し 髪を 掃り せり 過角

中

古

昨夜を母とやうくの祝ひとて提重  
とてこれ一とた書と人より冬三いは  
いふらよとて今日に相好くまは  
く一日外に宿の方子とて路から一  
所攻の後まきけはおとまといひの  
目もかきかきといふまは

菊と菊かききて移りて秋の風 左雲

身きぬよ刺おききて秋の風 陸  
所く終くといふ方と仕舞ふ素字 改東

五日

きよ初立のいひして凡て亭の  
かきといふまは身敵を亭の  
ふ野をくといふおはくかたよ同道あり  
瓜蒬子の島とあらく菊鶴乃乃園を  
かよて道のいふと二百金かまへ  
中よかきや川原とてひと橋をかけり  
右よ一二の橋をく澤馬乃乃の音  
りおゆよといふて冬書るまは坂をいあり  
病後の人とらふといふ似たり敵者か



しつとあり肯たいらをれをきり  
く町いまをきりやいひまのしりしり  
いひのたじむとこれいひのしりしり  
かつ夜は師の町りりきまをの伊と  
くらぬ一今い本をたよりりてま  
あし東海道とぬる一いおのあさるぬの  
本をたよりりい直りたりあ一り  
凡てと道とる一てまの枝葉のた園と  
いひまをきりまのしりしり今れ時  
のさくきいけりまも余い

きれとくまうひてことまを  
うきとけり

90  
兼の香不山路の路、病のりり  
砂を多と次去乃知 月 風し  
竹葉路く思さと拂りせく 耳各  
は子町さきうおんけり 糸油 儿水  
はくや月成仔乃りり 町 燈 糸各  
まをきりまをきり 糸油の芽 絞者  
たんしりま下のちりやうぬてあろ 阿世  
部いさいら長家あろ 村 兼

中  
兼

此菌号

曠草をあるやし風折のこま人よて  
 夷洛よその名とおき所一々今又と也の  
 先のなまを人こそとまこく信らるる力ま  
 拈てその根きこすその親あななりと  
 それ子を嘆きんやけ子小此菌の二や  
 あとえて家上二糸の母ほひきしん  
 とすうくはとていふあまひ  
 袴をて穿く菌のよぬひう那ふ花信

茶亭ふやん

式をアんで小をもとこく本この秋 茶信  
 世いこくく小茶 極く 園 岳亭  
 月影し横よ貴旅をみ越く 阿世  
 二人の孫乃袴とく 風し  
 100 夕あやや朝日とるく 氷餅 耳谷  
 城下とらふもよ山掃除く 川木  
 ちほふくあまのまをせ病て 鮫舌  
 ら風をくよあらけり 茶下

茸持

い亭の茶後を皆松系にして酒後三茸  
持の具とそあるふと先不耳若江師目  
をかきく持くいから其茸よまを  
さしとるへしその酒の度らし  
三師或いは酒のれとこ或いは皆白松の  
おちらうよぬさりれが年あつて  
うまむ茸をうい々あつて乃を  
まがれあつてふらきん親らよ我  
あひあつてねへは除く鬼七無

あつてもちたれ人ふらつて木おの  
藤とこあけり池をらつて  
い新く一日のあつていふらつて  
赤花坊いとけくはれあつて  
腰をたつてまの持場の着到下は乃人  
しそこまらつて

茸指や保不眼息令の庵カ赤花坊  
茸持不若我兄才の子柄が来台  
茸持やあつてあつてわの下風乙  
えけり利や借の道とあつて  
皎雪

七月

草待子瓢おとさるる中より 儿木  
 たりしやる母膝をく 阿世  
 110 草お中やお慰へね日と 青柳  
 草お中 照お中す 雨  
 ちかちかおや人の跡を 夕雨  
 儿木老人いささか世をよりのよ  
 ゆりのりやい給ふらんは 夕雨  
 をあがり市中に 照お中す 雨  
 らくお中りて 照お中す 雨

八月

五箇

草待子瓢おとさるる中より 儿木  
 たりしやる母膝をく 阿世  
 110 草お中やお慰へね日と 青柳  
 草お中 照お中す 雨  
 ちかちかおや人の跡を 夕雨  
 儿木老人いささか世をよりのよ  
 ゆりのりやい給ふらんは 夕雨  
 をあがり市中に 照お中す 雨  
 らくお中りて 照お中す 雨

海はくもつらふりしうへに  
を於ては海山の境界は似合  
りしうへに木のたぐひも  
尾花らけに勢やうなりし

東花坊

三徳上人の詩

### 竹遊人

園遊

昨日の園の内見おしつゝ  
ふは能くまゝにこそおも  
一と云はなしたるもさ  
おののさきとておもひ  
くま何そと静まの二種  
とんをうらでし遊下い  
はははははははははは

東花坊

菊八日

ふはね

年

九日

勅請文

今日は何の風情とあつた福とけられたの事  
をくつた神祇佛をを招待して兼て日の  
酒古を信じてよ ありてお祈りや茶茶師如  
何色く後痛の法印よ今の比昔の時よ  
定ちて抽味等よ一盃のあつたや一入つた  
ちくお祈り

親善の事事い今の世れ合盛所保ち  
まふはれはささくお祈り

以て七月の事さしけあるお祈り  
まの事夜いよよ心みるか  
春は安けいこの世は日本たごい  
我お境界よ人多くよい  
家よ多かこの世は日本たごい  
れ方をよいよ心みるか  
夷之部大甲よいよ心みるか  
あつた事いよ心みるか  
あつた事いよ心みるか  
あつた事いよ心みるか

中

二

布袋和尚の腹乃く居やうくさう病後二日  
たうくも鼻毛のくまて信舟ト交し  
らうや他路の葉をひよ章詠天ひとりのみ  
りささき陽の門礼ふこ塚をちくのく権を  
ぬすすを承あてても心すすその連者の心  
あやうくくく

おと鳥慧婆大明王こそけ左のつればら  
うくきれたくいのをくさあさるのくくあ  
くもけいすきさひよとぬれいんとあこく  
のくくおくよかともいひ保系れおおあうて

こそくかろいんまきうてん

塚よきさるて章詠くまきうく誰やういひ  
こそひ路あい例の道社社丹さぬうあを  
その笠も流らんそのあうこそあうく  
そあひすくまの力をくくおおあひは  
そあひすくまの力をくくおおあひは  
の首達を祝あへくと信舟信傳一音か  
けおやちとそくちうくあをく

葉師如来

儿水

観音

夕雨

観音のほほはよとてや葉れは

神農

青柳

百草のほを長より葉のを

智度

阿世

笑ふやと春はあはれや一か葉の

多智明神

耳谷

葉のほや神とて終て抄るや

夷之守

皎雪

けふも小敷はほほはよとてや葉れは

大正殿

友雙

子綿餅や大正殿に神の喜

布袋和尚

尻し

葉れやて過能く中より布袋は

韋駄天

早儀

草花天を中分代後くさるや

馬菩薩

岳亭

南仏七石強りて一より神の

道祖神

支考

130 葉れ小敷はほほはよとてや葉れは



十日

この日彼等亭の事あり紅ひき  
と合竹遊亭の客ありし事あり

市中マ十日の菊入客ありし事あり  
新井茂也掛りし事あり  
株もくや陽子むしとく事ありて  
更也  
籠の小鳥れあそびさひく事あり  
ちかんれい又茂也とる梢と事あり  
朝起別く、氣たまあしたき、  
鬼と

題十日菊

この菊を十日とて言ひとてしりたり  
中地  
そきて十日の菊と月と兼子  
言つたりとる菊を起して十日は  
里夕  
定よりとる撰撮の菊乃十日は  
半十  
此とくや十日の菊と砂とて  
白竹重  
飯重方よりとる菊は坊屋の  
物といふと人こまれたり  
飯重  
物小と菊の香わたり  
飯重  
十日とく菊はかり菊乃とれ  
竹重

十一日

いよ夏法より花飾ある若文

ふりおの病腹よりくくく

角片正勝を区女あり

いよ小菊といは娘ー我の病若文

状色や花飾と月日菊の正勝

いよ夏の花飾

若葉あつた

絵を同じく葉をとりまの男は 角片

いよ然る園分おなうーいよ他

おなうし下東花飾かうま

えんろくくやーいよ

いよくそ夏の付しらお

あつろいそくく若葉

きつろく馬妓おれ

いよ指ちえとくく

いよとやーいよ

いよ流く糸をえと

いよあつたけい葉あつた

中

十五

十二日

長情のいとぬき手巾を

牛の筋の道く

端ハシにふんくぬきよもつ屋やを所 皎舌

かき門の竹のむしるぬ下 月 竹を

<sup>150</sup> 金屏丹柱のすゝめを奪きて 又老

しと川のほれよの初と 碎 更也

健張の介いふあせさる 海一 船 竹童

あやうきものそと名とらふ 鬼子

十二日

桂花楊草

夕宵十三夜八月又むすそめく 風流は

もくもくしるしは株ん此あつたわ 今宵の月

を空かかすうふ似たり 橋よのたつち九階

そらと眺るよふふひくすやんは 柳は

東北に度く山の西南に序くるれり 柳の影を

明もれゆかを月いそ宵の月わすて 洞を

ねくもくちさるへし 小倉れるる 田子丸を

よんくし株とそそりて 守りしものなし

中

二十六

さきこひあつしけ竹花の市原の子ぬぢうさふ  
と利風新のふひを心をたてあつくさふ  
あつたふらふ事羽化して空の鳥なり  
まよかき月の月をきりては珠の石ありんは  
若はけて桂の花をさしきりてやとてあふ  
きとゆいんを序とふのみ

支考

雲の梅影あふるしつよの月  
つんぼつらう原のをとてあつた竹花  
梅影しけ竹花とさかひきりてあふ  
さかひく風乃吹かりつらあふ  
鬼子

160

振まゝ衣柄の縁代白きるを竹華  
大さ花の鳥よ市原の子ぬぢうさふ  
おきてあふるはれハ花をさり  
いさふをさるふはぬさぬ草との  
八九間ゆけしそまけ行まふ  
さきまをて地をさかひきりて  
ゆつたてぬひくさふはれはれ  
はれはれゆけし又さふれさ  
菊若れ田草とやさふれはれ  
さきまをてあふるはれハ花をさり

中

三十一

別辭

此夕をうらよみははははと立あつて例  
のけさよれ心ひとさみいあさうれはみ  
一葉二夜をくんとありてさうくはとく  
候とせりあうしとれはゆめ人たるま  
その家れとんまうんをさるぬまう  
いひまのうしうんをさるくしうま  
古字ふれをいて中くまをま折る  
うらよれまうしとれはゆめあは

あつてまをさるくしうま  
小かくていえあさうしうま  
候とせりあうしとれはゆめ  
人たれぬれ心ひとさみいあ  
まうしう

赤松

一月



